1960年代および70年代前期アメリカ建築思潮におけるコンテキスト概念

—現代建築におけるコンテクスチュアリズムの研究 その1—

ON THE TRANSITION OF THE CONCEPT OF 'CONTEXT' IN THE AMERICAN TREND
OF ARCHITECTURAL THOUGHT FROM 1960 TO EARLY 1970'S

Study on 'contextualism' in contemporary architecture Part 1

秋元 馨*

Kaoru AKIMOTO

This research is a trial to make the concept of the 'contextualism', which has been pursued widely in America during the last three decades, clear.

This paper reexamines the transition of the concept of 'context' in the American architectural thought from 1960 to early 1970's.

Until the mid-1960's, the word 'context' became used at the level of physical environment. At that time, the concept of the 'contextualism' arose out of seeing cities as both buildings and spaces; it was conceived as a set of strategies for building in cities and it proposed the continuity between adjacent buildings.

Although after the mid-1960's, when many critical writings about modernism were published, the word 'context' became used at the level of semantics of environment gradually.

Keywords : context, contextualism, Colin Rowe, Robert Venturi, the Cornell School

コンテキスト, コンテクスチュアリズム, コーリン・ロウ, ロバート・ヴェンチュリー, コーネル派

1. はじめに

1.1 研究の目的とその背景

本研究の目的は、現代建築においてコンテクスチュアリズムという概念が、その成立から最近に至るまで、どのようにとらえられ、どのような役割を伴ってきたかを明らかにすることにある。本稿では、1960年代および70年代前期アメリカ建築思潮におけるコンテキスト概念の変遷を検証する。

ラテン語のcontextus（語義：織り合わされたもの）を語源とする単語contextは「コンテキスト」「文脈」と訳され、ふつう「文における個々の語または個々の文の間の論理的な関係・続き具合」⁸⁵を意味する。転じて日常用語としては「ある事柄の背景や周辺の状況」⁸²という意味がある。また、建築論にコンテキスト概念を導入したのは1950年のヴェンチュリー（R. Venturi）が最初とされ⁸³、最近の建築用語としては、たとえば「建築では特定の建築物に関する、歴史的、文化的、地理的な背景となる条件などをさす」⁸⁴という概略定義がある。

一方、コンテキストから派生した「コンテクスチュアリズム contextualism」という言葉を建築・都市論の分野で術語として用いたのは、1960年代半ばにコーネル大学大学院でロウ（C. Rowe）

の指導下にあった学生コーエン（S. Cohen）とハート（S. Hutt）が最初とされる⁸⁵。これには、たとえば「設計の際に敷地、あるいはその他のコンテキストを重視して発想する姿勢」⁸⁶という概略定義がある。

このコンテクスチュアリズムという用語は、70年代から80年代前半にかけて流行し、その概念は広く支持された。コンテクスチュアリズムは「ポスト・モダン」期に有力となった設計上の立場の一つに位置づけるのが定説であるが⁸⁷、80年代後半以降は批判論も多く、むしろ否定的な認識が強まった。

これまでにコンテクスチュアリズムを主題とする論考としては概念の提唱者であるコーネル派⁸⁸の著作⁸⁹がある。ほかには、現代建築紹介論や建築批評の中に数多くあるが、いずれも部分的トピックとしての扱いにとどまり⁹⁰設計過程におけるコンテキスト概念の内容や働きについて理論的に示すものではない。また、コンテキストおよびコンテクスチュアリズム概念の意味内容は拡張しており、その適用範囲は一様ではなく、未だ統一的に認識されているとはいえない。近接する既存概念⁹¹との相違についても曖昧である。

* 横浜国立大学工学部建設学科 助手・工修

Research Assoc., Dept. of Architecture, Faculty of Eng., Yokohama National Univ., M. Eng.

1.2 研究の方法

現代の建築は、1960年代半ばに、それまで主流であった近代主義建築の理念に対する批判が頻発し、デザインの規範が大きく変容した。こうした周知の理解と、コンテクスチュアリズムという用語の初出をコーネル派とみる通説にしたがい、研究対象期間は1960年代以降とし、資料の収集範囲は1960～89年を原則とした。

本研究ではコンテクスト概念を含む言説を〈コンテクスト論〉と呼び、それらを経年的かつ網羅的に収集し資料とした¹²。このとき、関連分野として都市デザイン論、歴史的環境保全論および設計方法研究との関係に留意した。

1.3 本稿の構成

1960年代以降のコンテクスト論とその背景となる社会状況の変遷をふりかえると、これを4期に分けることができる。まず近代主義建築批判論の黎明期にあつて「コンテクスチュアリズム」という用語が使われ始めた1965年頃以前の第Ⅰ期。つぎに近代建築批判書の刊行が相次ぎ、歴史的環境保全制度の整備が進む中、コーネル大学で設計方法概念としての「コンテクスチュアリズム」が提起された、1966～72年頃までの第Ⅱ期。続いて「コンテクスト」「コンテクスチュアリズム」という用語が普及し流行語となる、1973～82年頃までの第Ⅲ期。そして、コンテクスチュアリズムが流行概念となるのに並行して批判論や多様な解釈が現れる、1980年代中期以降の第Ⅳ期である。

以下本稿では、初めに1960年以前のロウとヴェンチューリのコンテクスト観を明らかにし、続いて第Ⅰ期ならびに第Ⅱ期におけるコンテクスト概念の展開を検討する。

第Ⅲ期以降については、次稿で検討する予定である。

2. 1960年以前におけるロウとヴェンチューリのコンテクスト観

第二次大戦後、1950年代のアメリカ建築界では、近代主義建築の合理的側面が開花し、インターナショナルスタイルが普及した。当時の都市計画で主要な関心事であった都市再開発¹³を代表する「都市更新 urban renewal」プログラム（1954年）¹⁴も近代主義建築の理念に基づいたものと考えることができる。

しかし世界的にみれば、すでにこの時期には、近代主義が引き起こした社会的問題が顕在化していた。アメリカにおいても、従来から近代主義建築に対する批判的動向は多少なりともあった¹⁵。こうしたなか、政策的に進められた都市再開発の隆盛に並行し、都市形成における建築のあり方が課題化した。

2.1 ロウの初期著作における「曖昧性」「折衷」「現象的な透明性」の概念

ロウの初期著作のうち、イギリス国内および初渡米後のテキサス大学勤務中に執筆した近代主義建築批評に、部分的にコンテクスト概念が現れている。

1947年の「理想的ヴィラの数学」¹⁶において、ロウは、バラディオとコルビュジェのヴィラを比較し、建築造形の表層に見える形態要素ではなく、深層に読みとることができる形態構造を分析した。そして、近代主義建築およびインターナショナルスタイルの典型とされたヴィラ・シュタイン（設計：ル・コルビュジェ、1927年）と古典主義建築であるヴィラ・マルコンテンタ（設計：バラディオ、1550～60年）の平面が共通する形態構造をもつことを指摘した。

図1 「図と地」の構成にもとづく演習作品、テキサス大学学生、1957年
左が現象的な透明性、右が字義通りの透明性。

ここでロウは、コルビュジェが設計で行う「歴史への参照 historical reference」には、そこに元来の意味とともに現代のコンテクストにおける新しい意味を読みとることができる「曖昧性 ambiguity」¹⁷の効果、すなわち新旧双方の文脈に結ばれるという「引用の二重の価値 the double value of quotation」があることを指摘し¹⁸、その造形的価値を認めた。一方、対照的に、バラディオが設計で行う「歴史への参照」には、古代ローマという特定の文明への思い入れがあり、単に既知の形態要素という一義の意味が読みとられる点を強調した¹⁹。

続いてロウは、1950年の「マニエリスムと近代建築」²⁰においても「曖昧性」の効果を生む要因が「折衷」にあるとし「折衷主義」を方法として積極的に肯定する立場を打ち出した²¹。

このようにロウは「二重の価値」の有無を基準として、折衷主義の手法である「歴史への参照」という行為を「引用 quotation」と「模倣 pastiche」に区別した。そして、かつて古典主義がギリシャ、ローマの古典芸術を一義的に規範とみなした結果「墮落した『法則性』のみに固執する」²²態度に陥ったように、当時の近代主義建築の多くが模倣や教義に固執する態度に陥り、派生的作品となっていることを指摘した。

1951年に渡米してイエール大学に学んだロウは、1953年テキサス大学に赴任し、同僚でやはりイエール出身の画家であるスラツキー（R. Slutzky）らとともに、アルバース（J. Albers）の色彩構成理論²³やゲシュタルト心理学に基づくアルンハイム（R. Arnheim）の視知覚理論²⁴を応用した建築基礎教育を行った（図1）。そして、1955年から56年にかけて、ロウとスラツキーは「透明性—字義通りの、そして現象的な—」²⁵「透明性—字義通りの、そして現象的な。第二部—」²⁶を執筆した。

この中でロウらは、二次元図形の「透明視 transparency」現象や「図と地 figure and ground」現象²⁷（図2）とともに起きる三次元性の知覚現象を建築造形の分析に応用し「折衷主義」「曖昧性」「二重性」の概念を知覚現象として説明した。

ロウらは、当時、近代主義建築の属性として賞賛されていた「透明性」を、近代絵画を比較分析することによって抽出した二つの概念に区分した。すなわち曖昧性の感覚を生じさせない「字義通りの透明性 literal transparency」と、分析的キュビズムの作品に特徴的な、多義的で興行き感覚を生じさせる「現象的な透明性 phenomenal transparency」²⁸を区別した。

図2 アルプ (J. Arp) の木彫作品分析図,
アルンハイム, 1954年

3-1

3-2

「図と地」の反転現象にもとづき多義的な
解釈が可能となる。

図3 バウハウス校舎と国際連盟本部案における「透明性」の
比較分析図, ロウとスラツキー, 1955-56年

図4 カンビドリオ広場の分析図, ヴ
ェンチャーリ, 1953年

ロウらは、この分析概念を近代建築の造形にあてはめ「字義通りの透明性」の例にバウハウス校舎 (図3-1 設計: W. グロピウス, 1925-26年) を「現象的な透明性」の例に国際連盟本部案 (図3-2 設計: ル・コルビュジエ, 1927年) をあげた。そして「字義通りの透明性」に比べてより複雑で曖昧な視覚効果である「現象的な透明性」に高い造形的価値を認めた²³⁹。

2.2 ヴェンチャーリの初期著作における文脈効果の概念

1950年、ヴェンチャーリがプリンストン大学に提出した修士論文「建築の構成におけるコンテキスト」²³⁰は、ゲシュタルト心理学から発想した「環境の芸術 art of environment」の問題を検討した論考であった (図4)。

ヴェンチャーリは、建築物の配置効果という観点から16・17世紀ローマの建築と都市空間を図解により分析し、建築が、それ自身で独立する存在としてではなく、全体およびその他の部分に関係づけられた全体構成の部分として知覚されることを指摘した²³¹。

ここでヴェンチャーリは「意味 (meaning) はコンテキストのなかから生まれるのであり、コンテキストが変われば意味も変わる」²³²「建築物のコンテキストはその建築物に表現 (expression) を生み出す」²³³と述べ、知覚過程とは逆の、創造という過程においても、コンテキストに働きがあることを指摘した。また、設計者は「新しいものを用いて現状を視覚的に高めることができる」²³⁴とも述べ、空間位相の関係だけではなく、対象に付随している「新 new」「旧 old」という時間位相における属性を統制する課題にも着目した。

2.3 「曖昧性」「折衷」「現象的な透明性」に通底する文脈効果

心理学において「文脈効果 context effect」と呼ばれる現象があり、広義には、人の知覚過程に「記憶、判断、理解などに文脈が影響すること」²³⁵をいう。前述した、都市形態に関するヴェンチャーリの考察は、これを応用したものと考えることができる。

一方、前述のように、ロウは、絵画と建築の形態における「曖昧性」の効果と「折衷」の効用に造形的価値を認めた。そして、近代主義建築の典型とされたコルビュジエの作品に、歴史上の作品を参照したことと同様の形態構造が含まれることを示し、コルビュジエの作品全般にみられる「曖昧性」と、近代主義が否定した折衷主義の方法とが同根であるとみなした。

このような認識は、折衷を歴史主義とみなして否定した近代主義²³⁶に対する理論的な反証であり、折衷を様式概念としてではなく

「曖昧性」効果を伴い「現象的な透明性」を生み出す方法概念として再評価したものと考えられる。

そして折衷という行為を、ある対象 (object) を特定のコンテキストから異なる別のコンテキストに移す操作であるとみなすならば「曖昧性」とは「折衷」の結果、対象に付与された性質であると理解される。すなわち、ロウが「曖昧性」概念を建築造形に適用した基底にも「文脈効果」の認識があったものと考えられる²³⁷。

このように、ロウとヴェンチャーリによる1960年以前の著作には、文脈効果の理論が通底していることがわかる。しかし、英国誌に掲載されたロウの論文および未公開であったヴェンチャーリの修士論文は、近代主義全盛下にあったアメリカ建築思潮に大きな影響は与えなかった²³⁸。

3. 第Ⅰ期 (1960～65年) : 近代主義批判論の黎明期におけるコンテキスト概念

第二次大戦以前からのスラム・クリアランス方式を引き継いで制度化された50年代および60年代初期の都市再開発は、やがて「開発と保存」という対立する問題を顕在化させた。すなわち、物的環境の改変に対する従前居住者の反発や、歴史的建造物の破壊に対する幅広い市民による組織的反対運動が起きた。特に、歴史的環境に関しては、1962年のペンシルヴェニア駅取り壊しをめぐる論議を契機として、保全の必要性を認める世論が高まり²³⁹、スクラップアンドビルドの都市更新を問題視することの転機となった。一方、建築が大規模化し機能の複雑化が進むにつれ、設計への要求や条件に質的变化・量的増大が生じた。これらの問題に対処するため、1960年代初頭には、体系的に設計方法を論ずる研究が現れた²⁴⁰。

こうした状況にあった第Ⅰ期は、近代主義批判論の黎明期として位置づけることができる。そこでは、技術的専門分野として50年代後半に確立した都市デザイン (urban design)²⁴¹に関する言説の中にコンテキストという言葉が用いられた。また、環境デザイン分野全般に大きな影響を与えたアレグザンダー (C. Alexander) は、彼の設計方法論にコンテキストの概念を導入した²⁴²。

ロウは1963年、コーネル大学に赴任し大学院に都市デザイン・スタジオ (Urban Design Studio, 以下「U.D. スタジオ」と略記) のコースを開設した。一方、ヴェンチャーリは、独立した設計活動を開始後まもない時期にあり、めだった著作の発表はない。

図5 ペレとコルビュジェのソヴィエト宮コンペ案の比較，コリンズ，1959年

3.1 コリンズの「歴史的連続性」概念

60年代初頭の都市デザイン論においてコンテキスト概念は、単体建築にとって、その中において協調する努力を求められる環境を意味し、建築の評価基準の一つとして用いられた⁴⁵。

たとえば1962年、カリフォルニア大学環境デザイン学科のハッシド (S. Hassid) は、スタジオ (設計科目) における6つの評価基準の一つに「環境のコンテキスト context of environment」があると報告した。この文中には「環境 environment」という単語に「物理的コンテキスト physical context」の併記があり、その具体的内容として「敷地 site」と「気候 climate」を含んでいる⁴⁴。

1963年の建築史家コリンズ (P. Collins) による記事「ゲニウス・ロキ Genius Loci」⁴⁵には、見出し中に「環境のコンテキスト the context of their environments」という記述がある。

すでに1959年の「コンクリート」⁴⁶において、コリンズは、ペレ (A. Peretti) とコルビュジェによるソヴィエト宮計画案を比較し、周囲の環境の中で弧絶してみえるコルビュジェ案に対照して、広場を囲い込み周辺街区と一体的にみえるマスを形成するペレ案を高く評価していた (図5)⁴⁷。

コリンズは、この記事においても、歴史上の代表事例を挙げ、ある特定の建築がその周囲および近傍に先行して建つ建築群と調和している環境の魅力を示し、20世紀における事例としてA. ペレの作品を挙げた。そして、コンテキストという言葉を用い、ある特定の建築が直接的に隣接するほかの建築群を指して用い、都市における「歴史的連続性 historic continuity」の重要性を強調した。

3.2 アレグザンダーの「適合性」概念

1964年の「形の合成に関するノート」⁴⁸において、アレグザンダーは、ヤカンのような道具にはじまり建築の部位および都市に至るまで、種々のスケールの対象を包括的に把握し設計する方法を検討した。そして、数学に基づき、デザイン・プロセスの普遍的なモデルを提示しようと試みた。

ここでアレグザンダーは、コルビュジェなど近代主義の巨匠建築家に典型的な設計方法を指して「自覚されたプロセス」と呼び、その教条的な姿勢を批判した。そして、対照的に「未開」「民俗的」「閉鎖的」「匿名的」な文化にみられる設計方法を「無自覚なプロセス」と呼び、そこに「よい適合の源」があるとして推奨した。

ここでアレグザンダーは「かたち form」と「コンテキスト」からなる全体集合を指して「アンサンブル ensemble」と呼び「アンサンブル」を形成する際に「かたち」と「コンテキスト」は相互に作用しあうことを示唆した。そして「アンサンブル」をつくるため

に「かたち」と「コンテキスト」が「適合 fit」することの必要性を強調した⁴⁹。

アレグザンダーは「適合」という概念を、アンサンブル全体の統一と良好な状態にとって常識的な意味で何らかの有害要素となる「ストレス」が「起きない」場合のことと規定している⁵⁰。この点で、アレグザンダーは、建築の価値を、作品のかたちそれ自身ではなく、かたちとコンテキストが「適合」する関係をもつことにおいていると考えることができる。

3.3 ロウのユートピア主義批判論

ロウは、テキサスからいったんイギリスに帰国した1958～62年の間、ケンブリッジ大学に在職し、そこで研究の関心を従来の建築から都市計画の問題に広げた。この時期に執筆した「ユートピアの建築」⁵¹の中で、ロウは哲学者ポパー (K. R. Popper) の社会変革論を参照し、都市計画における近代主義を批判した。

ポパーは、ファシズムやマルクス主義が引き起こした不幸の要因を、歴史の必然の法則という迷信すなわち「歴史に宿命があるという信念」にとらわれた権威主義にあるとし、これを「歴史法則主義 historicism」と呼んだ。そしてそのような思想を「ユートピア主義 utopianism」および「全体論 wholism」と呼び、その論理的欠陥を指摘し、徹底的に批判した⁵²。

ロウは、フィラレーテによるスフォルツィンダなど、ルネッサンス期に描かれた理想社会の都市像がいずれも円形平面をもち、単調で多様性に欠けることを指摘した。そして、これらをポパーがいう「ユートピア主義」の範例としてとらえ、同じように、近代主義都市計画の典型である未来派とコルビュジェの計画案の理念に含まれる「ユートピア主義」と過去を否定する「歴史法則主義」を批判した。

この論考においてロウは、とりたててコンテキストという概念を用いてはいない。しかしここで建築から都市へと関心を広げたことは、1963年に再渡米したロウがコーネル大学にU. D. スタジオを開設する契機になった。1965年頃、そのU. D. スタジオにおいて、学生のコーエンとハートは、スタジオのメンバーが提起する設計上の方略 (strategy) を指しコンテクスチュアリズムという用語を使い始めた。

3.4 環境としてのコンテキスト—建築造形における有意味の単位の拡大

都市デザインの概念は、建築造形における有意味の単位を空間的に拡大し、その環境の価値に視点を向けさせた。また60年代初頭に台頭した歴史的建造物の保存運動は、環境の価値の歴史的側面に注目を集める契機となった。こうして、設計対象となる建築概念の枠組みはしだいに空間と時間という両方の位相に拡大した。

「環境」という単語には、元来「主体となる生物をとりまく外界のすべて」⁵³という意味がある。これに対して、知覚に関する用語としての「コンテキスト」は、元来、人が対象をみるときに、対象の前後左右を囲む、空間上の近傍を指す概念である。このような観点からみれば、従来より類義語として環境の物理的 (physical) 側面を意味して用いられていた「コンテキスト」という概念は、第Ⅰ期において建築概念の枠組みが拡大したのに伴い「環境」の物的側面と歴史的側面、すなわち空間位相と時間位相の双方を包括する概念としてとらえられるようになったと考えることができる。

4. 第Ⅱ期 (1966~1972年) : 近代主義批判論におけるコンテキスト概念

1960年代半ばから70年代の建築思潮には近代主義批判論が頻出した。ロウの指導のもと、コーネル大学U.D.スタジオでは方法概念としてのコンテクスチュアリズムの基礎理論がまとめられた。しかし、近代主義批判という思潮の中心的存在となったのは、建築作品に並行して積極的に論考を発表したヴェンチューリであった。

一方、60年代後半以降、歴史的環境保全に関わる制度の整備は格段に進んだ⁸⁵⁴。これに伴い、歴史的環境保全事業は建築設計上の課題としてしだいに注目を集め、それに関連してコンテキストという言葉が用いられた。

4.1 コーネル派のコンテクスチュアリズム

1963年以来、ロウとU.D.スタジオの学生らは、近代主義建築の理念に含まれるユートピア主義に対する批判を基底に置きつつ、建築形態と都市形態の関係を主題とする研究とプロジェクト制作を行った⁸⁵⁵。その基礎には、コパー (W. Copper) が示した都市形態における「図と地」概念がある。

コパーは、1967年の修士論文「図／地」⁸⁵⁶において、ゲシュタルト心理学の視知覚における「図と地」現象を都市形態分析に応用し、都市図集「図と地マップ Figure/Ground map」を作成した。

「図と地マップ」は、原則として平坦地にある6階建て以下の建築物からなる都市の水平断面図である。およそ5階レベルの「固体 solid」部分と「空所 void」部分をそれぞれ黒と白の部分に塗り分けた地図で、実際にはさまざまな高さや色の建築物が集合している都市の形状 (configuration) を、固体と空所のいずれかに抽象化し、都市形態を「図と地」現象の水準で把握する⁸⁵⁷。

コパーは、伝統的都市の「図と地マップ」における特定の建築物とその周辺部では、その建築物をおいてみるコンテキストにより「図」と「地」のどちらにもみえること、すなわち、心理学という多義図形⁸⁵⁸と同様の可逆性 (reversibility) があることに注目した⁸⁵⁹ (図6)。また、市街地全体を視野に入れ巨視的に眺めるとき、特定の建築群や街区群がまとまりをもってみえる場合があり、そのようなまとまり指して「フィールド field」および「ゾーン zone」と呼び⁸⁶⁰ (図7)、伝統的都市の形態においてはフィールドやゾーンが「階層 hierarchy」をなすことを指摘した⁸⁶¹。

このような観点から、コパーは「コンテキストの概念を再認識すべきだ」と述べ、現実の歴史を「連続体 continuum」としてみる歴史観を主張した。コパーの都市図集は、ロウが理念の水準で指摘した近代主義都市計画の欠点を具体的に示す基礎資料となり「図と地」を分析概念として用いる形態分析は、コーネル派の研究と設計の基本手法となった。

また、テキサス大学時代にロウの学生であったデニス (M. Dennis) は、1963~69年の間、ヨーロッパに遊学し、1969年よりコーネル大学教員となった。デニスがその平面の意義を伝えた、フランス・バロック期の邸宅建築オテル・ド・ボーヴェ (図8。設計：アントワヌ・ル・ボートル、1652-55年) は、1970

図6 図と地マップ, コパー, 1967年

上: サンタ・マリア・デル・フィオーレ, 下: サンチャゴ・デ・コンポステーラ

図7 図と地 反転マップ, コパー, 1967年
1840年頃のミュンヘン市街地。

図8 オテル・ド・ボーヴェ 1階平面図

Diagrams A, B, C, D, E.

図9 バッファロー・ウォーターフロント計画
マスタープラン。

図10 バッファロー・ウォーターフロント計画
理想形の変形過程を示す計画概念図。

年代初期までのコーネル大学の学生にとって「変形」概念の範例となった。^{注62}

1971年、ロウの助手シューマッハー（T. Schumacher）は、これらU.D.スタジオでの研究とプロジェクト制作の成果を集成し「コンテクスチュアリズム」をはじめて理論的に規定し、近代主義建築に対峙する方法概念として位置づけた¹⁶³。

シューマッハーは、物理的にみて二十世紀の都市は、近代主義建築によって形成される「公園の中の都市」と、近代主義以前の「伝統的な都市」という、対概念の結合として形成されていると考えた。そして当時のアメリカ都市においては「公園の中の都市」が「伝統的な都市」を破壊、侵食している混濁状態が数多く生じており、その要因は「理想形としての建築」を目指す近代主義建築の理念にあると主張した。すなわち、近代主義建築は、一方的に自己の内部からの要請にもとづき「理想形」を目指して外形をつくるため、既存の都市の中で孤絶する傾向があることを指摘した。

シューマッハーは、設計対象とする建築の「理想形」を想定した上でそれにコンテキストに応じた「変形」操作を適用するという、両者共存の方法に、現代都市が抱えている、伝統的な都市の破壊という問題を解決する可能性があるとして主張した。そしてその事例となる建築作品とバッファロー・ウォーターフロント計画（図9、図10、設計：コーネル大学U.D.スタジオ、1966年）などの都市デザイン・プロジェクトを紹介した。

4.2 ヴェンチューリの近代主義批判論

1966年、ヴェンチューリは『建築の多様性と対立性』^{註54}において近代主義が否定してきた折衷主義を全面的に擁護する姿勢を打ち出した。

ここでヴェンチャーリは、詩作と文芸批評の理論⁴⁵⁵を適用し「二重の機能をもつ double-functioning要素」⁴⁵⁶「二重性 duality」⁴⁵⁷「慣習的な要素 conventional element」⁴⁵⁸「慣習を非慣習的に用いること using convention unconventionally」⁴⁵⁹など、言葉を慣習と異なる文脈におくことによって生まれる詩的效果を、建築造形上の方法として用いることを提起した。

続いてヴェンチャーらは『ラスヴェガス』^{注70}（1972年、調査実施1968年）においても「慣習的な要素」を使うことに着目し、エリオットの詩論を参照して、使い慣れたものを新しいコンテキストの中に置きなおして新しい意味を発生させる詩的用法を提起した^{注71}。

しかし、ここでのヴェンチャーリらは、60年代に急速に広まったポップ・アートの視覚効果を例にあげ、また60年代末に建築を対象とし始めた記号論を援用し²⁸⁷、結果的には方法としての詩的用法より、むしろ「慣習的な象徴」を形態要素としてを用いることの効用を強調した。

ヴェンチューリらは、米国内に一般的な郊外住宅地および沿道商業地の典型である、レヴィットタウン^{註73}とラスベガスの景観調査を行った。そして従来は醜悪とみなされてきた景観を構成している典型的建築の形態には一般大衆の建築嗜好を表す「象徴性 symbolism」が付随していることを指摘した(図11)^{註74}。この調査をもとにヴェンチューリらは、近代主義がそのような大衆の嗜好する象徴性の採用を拒否してきたことを批判するとともに、建築形態における「象徴作用 symbolism」^{註75}の重要性和大衆が嗜好する象徴を大胆に使用することを推奨した。

図11 郊外住宅地の象徴の祖型の概念図、イエール大学レヴィットタウン研究グループ、1970年

建築において象徴作用の概念は、人間の思考・認識や行動のメカニズムのなかで、建築を情報伝達手段の一種とみなす場合に用いられる。情報理論ないし記号論にもとづく、建築論では、建築を観照する行為を、建築を媒体としたメッセージの伝達過程とみなしている。そこでは、メッセージの送り手である設計者からメッセージの受け手である観照者への伝達過程全体を視野に入れている。すなわち、設計者がもつ美的規範だけでなく、観照者の内面にある価値感や関心のあり方が重要な問題となる。

ヴェンチャーリらの主張にも、このような情報の受け手すなわち読み手の立場を重視する志向 (reader-oriented) があつたものと考えることができる。

4.3 歴史的環境としてのコンテキスト

第Ⅱ期は、世界的に文化財の保存と修復に関する国際的な協力が活発化した時期であった。たとえば1964年に制定された、記念物および遺跡の保護と復元のための国際憲章である、ベニス憲章は「歴史的記念建造物」の概念を、単一の建築作品だけでなく文明や歴史にとって重要な都市および田園の建築的環境を含めて規定しており「保全」の概念にはその建物と釣り合いのとれている建築的環境の保存を含めて規定している²⁸⁷。

このように、建築の価値の歴史的側面に着目する際に、単一の建築作品としてでなく、周囲の環境も含めて有意味の単位とする考え方は、社会的にも広い支持を得ていた。

アメリカにおいても、歴史的環境保全はその気運が高まるとともに都市政策上の課題となったが、そこでも、上流階級の遺物だけを対象とする旧来の保存概念ではなく、すべての文化が保存の必要性を精査するに値すると認める文化多元主義の考え方や、環境の変化を容認しつつ文化財を保全するという考え方があった⁴⁷⁷。ここに、近代主義の理念が支持されていた時期に比較すると、建築の環境という概念は時間位相において大きく拡大したと考えることができる。

5. 結語

以上、1960年代および70年代前期について、コンテキストという概念のとらえ方の変化について検証した。

すでに50年代初頭、ヴェンチューリは建築形態を知覚するさいの文脈効果に注目していた。一方、ロウの初期著作にも、建築造形における「曖昧性」と「折衷」を支持する論理の中に、知覚過程における文脈効果の認識があった。

第Ⅰ期の60年代初頭には、コンテクストという言葉は、主として、ある特定の建築物にとって背景 (setting) となる環境の物理的形態を意味して用いられた。しかし、これを一般化して、環境全般を比喩的に指す場合には、コンテクストという言葉は環境の歴史的側面をも含むものとして認識された。

設計方法論にコンテクスト概念を導入したアレグザンダーは、形態 (form) とコンテクストの相互作用に着目し、双方が「適合」する関係にあることを重要視した。

コーネル大学U.D.スタジオにおいて、ロウと学生らは、ゲシュタルト心理学を応用する形態分析の観点と近代主義の都市計画を批判する立場から、都市形態論研究とプロジェクト制作を行った。「コンテクスチュアリズム」という用語はその過程で使われ始めた。

第Ⅱ期には、コーネル大学U.D.スタジオにおいて、コンテクスチュアリズムの理論的規定がなされた。シューマッハーは、コンテクスチュアリズムを「理想形の変形」という概念に基づく設計方法概念として規定した。

一方、ヴェンチューリは、近代主義批判論の中で、建築形態の詩的效果におけるコンテクストの働きに言及し「曖昧性」と「折衷」の造形的価値を前面に打ち出した。そして続けて、建築形態の意味の水準を重視し慣習的な象徴を使用する態度をも打ち出した。

ヴェンチューリの近代主義批判論は広く支持され、以後、ほかにも近代主義批判論が相次いで提出された。そして、歴史的環境保全の気運の高まりに符合して、アメリカはもとより世界の建築思潮は、歴史や過去の慣習を起源とする形態要素の採用を否定した近代主義から大きく転換した。

このときコンテクストという言葉の使用頻度も急増したが、従来に比較して歴史的水準 (すなわち時間位相) に置かれる用例が増えた。おもに物理的水準 (すなわち空間位相) にあったコンテクスト概念は、ここにおいて一般化が一段と進んだといえることができる。

注

^{注1} 英和大辞典カラー・オックスフォード、福武書店、1984年

^{注2} 松村明 (編) : 大辞林、三省堂、1988年

^{注3} R. ヴェンチューリ・D. S. ブラウン著、黒石いずみ訳 : 同時代証言—ヴェンチューリ&スコット・ブラウン—, at., 1992年9月号, pp. 22-29

^{注4} 日本建築学会 (編) : 建築学用語辞典、岩波書店、1993年

^{注5} Krantz, L. : American Architects, American References, 1989, p. 56

^{注6} 日本建築学会 (編) : 前掲書

^{注7} Whiffen, M. : American Architecture Since 1780. A Guide to Styles, MIT Press, 1992, pp. 295-296

^{注8} 本論では、ロウおよびロウがコーネル大学在学中 (1962-91年) に同僚ないし学生であったJ. Wells, M. Dennis, T. Schumacher, F. Koetter, S. Cohen, S. Hurr, S. Peterson等の建築家・理論家を指して「コーネル派」(Cornell School) と呼ぶ。

^{注9} Schumacher, T. : Contextualism. Urban Ideals and Deformation, Casabella, No. 359-360, 1971. 5/6, pp. 78-86; Shane, G. : Contextualism, Architectural Design, 1976. 11, pp. 676-679; Ellis, W. : Type and Context in Urbanism. Colin Rowe's Contextualism, Oppositions, Vol. 18, 1979, pp. 2-27; Hurr, S. : Contextualism. Of Paradigms and Poetry, Inland architect, Vol. 31, no. 5, 1987. 9/10, pp. 65-75; Cohen, S. : Contextualism. From Urbanism to a Theory of Appropriate Form, Inland architect, Vol. 31, no. 3, 1987. 5/6, pp. 68-69

^{注10} C. ジェンクス著、竹山実訳 : ポスト・モダニズムの建築言語、エー・アンド・ユー、1978年 (原書1977年刊), pp. 119-129 ; Klotz, H. : The History of Postmodern Architecture, The M. I. T. Press, 1988 (原書1984年刊), pp. 119-128

^{注11} コンテクスチュアリズムと共起度の高い用語に「環境environment」「歴史主義historicism」「伝統主義traditionalism」「地域主義regionalism」「大衆主義populism」がある。コンテクスト概念を「時代精神Zeitgeist」と同一視するところまで一般化する見解もある (ディヴィッド・マッケイ、1989年エイプリル・フールのステイメント、at., 1989. 6, pp. 68-70)。

^{注12} 本研究では、文章の全体またはパラグラフ中で“context” “contextual” “contextualism” という言葉を主題として用いており、建築批評および建築理論の範疇に含まれる言説を「コンテクスト論」と呼ぶ。文献資料は、米国内発行の主要な建築雑誌三誌 (Architectural Forum (以下AF、と略記する)、Architectural Record (以下ARec.)、Progressive Architecture (以下PA.)) の1960年から89年にかけて出版された号に掲載された記事、解説文、論文等に眼を通し、収集の徹底化を図った。単行書は、コーネル派およびヴェンチューリの著作を中心として収集した。建築家による自作の説明文は、作品と合同してひとつの設計思想の全体をなすものとみなし、収集対象から除いた。

^{注13} 西村幸夫 : アメリカにおける1960年代前半までの歴史的環境保全制度の展開、日本建築学会計画系論文報告集、第444号、1993年2月, p. 112

^{注14} 日笠端 : 先進諸国における都市計画手法の考察、共立出版、1985年, pp. 68ff.

^{注15} 山本治学 : 現代建築、ブリタニカ国際大百科事典第6巻、TBSブリタニカ、1973年, p. 763

^{注16} Rowe, C. : The Mathematics of the Ideal Villa, The Mathematics of the Ideal Villa and Other Essays, MIT Press, 1976 (初出1947年), pp. 1-27 (伊東豊雄・松永安光訳、理想的ヴィラの数学、マニエリスムと近代建築、彰国社、1981年, pp. 1-31)

^{注17} 「多義性」と訳す場合もある (伊東・松永訳、前掲書, p. 224)

^{注18} Rowe, C. : op.cit., p. 15 (前掲書, p. 25)

^{注19} ibid., p. 15 (前掲書, p. 25)

^{注20} Rowe, C. : Mannerism and Modern Architecture, The Mathematics of the Ideal Villa and Other Essays, MIT Press, 1976 (初出1950年), p. p. 29-57 (伊東・松永訳、マニエリスムと近代建築、前掲書, pp. 33-71)

^{注21} ibid., p. 43. (前掲書, p. 55)

^{注22} ibid., p. 16. (前掲書, p. 26)

^{注23} ジョセフ・アルバース著、白石和也訳、色彩構成、ダヴィッド社、1972年。本書の原書初版Josef Albers, Interaction of Color, Yale University, 1963. は出版準備に8年を要したという (前掲書p. iii)。

^{注24} Arnheim R. : ARTS AND VISUAL PERCEPTION. A psychology of the creative eye, The Regents of The University of California, 1954 (波多野完治・関計夫訳、美術と視覚—美と創造の心理学 [上] [下]、美術出版社、1963-64年)

^{注25} Rowe, C. and Slutzky R. : Transparency: Literal and Phenomenal, The Mathematics of the Ideal Villa and Other Essays, MIT Press, pp. 159-183, 1976 (執筆1955-6年, 初出1963年) (中村敏男訳、透明性—虚と実、at., 1975年2月号, pp. 69-82. 伊東豊雄・松永安光訳、透明性—虚と実、前掲書, pp. 204-230)。ロウは、執筆後まもなくAR. 誌に投稿したこの論文が掲載を拒否されたことについて、当時編集に携わっていたN. ベヴスナーの意向によるものと推察している (Rowe, C. and Caragonne, A. : AS I WAS SAYING. Recollections and Miscellaneous Essays, Vol. 1: Texas, Pre-Texas, Cambridge, MIT Press, 1996, p. 74)。

^{注26} Rowe, C. and Slutzky R. : Transparency; Literal and Phenomena. Part II, in: Rowe, C. and Caragonne, A., op.cit. (執筆1956年, 初出1971年), pp. 73-106 (中村敏男訳、透明性: 虚と実—第2部, at., 1975年9月号, pp. 31-44)

^{注27} E. ルビンにより1912年に名づけられたゲシュタルト心理学の重要概念 (宮城音弥、岩波心理学小辞典、岩波書店、1979年)。

^{注28} 中村 (前掲書) および伊東・松永 (前掲書) は「実の透明性」「虚の透明性」と訳出している。

^{注29} Rowe, C. and Slutzky R. : op.cit., p. 171

^{注30} Venturi, R. : Context in Architectural Composition, Iconography and Electronics upon a Generic Architecture, M.I.T. Press, 1996 (執筆1950年), pp. 335-374. この修士論文の一部をもとに、ヴェンチューリは1953年に、カンビドリオ広場周囲にある建築群の空間構成の問題を初公開著作の中で

論じた (Venturi, R. : The Campidoglio. A Case Study, The Architectural Review, 1953. 5, pp. 333-334 (邦訳, カンピドリオ広場の研究, a+u1981年12月臨時増刊号, p. 12)) .

^{注31} Venturi, R. : op. cit., 1996 (執筆1950年), p. 363

^{注32} ibid., p. 335

^{注33} ibid., p. 335

^{注34} ibid., p. 334

^{注35} 古畑和孝, 社会心理学小辞典, 有斐閣, 1994年

^{注36} Ⅱ. グロビウス, 建築は考古学の応用ではない, 生活空間の創造, 彰国社, 1958年 (1949年初出 (1951年ハーヴァード・メイヤーズ記念賞受賞論文), 原書刊1955年), pp. 74-51

^{注37} ところでこの「曖昧性」は, 近代文学批評の分野において, ウィリアム・エムプソン (Ⅱ. Empson) が価値を見いだした言語分野の概念であった (Ⅱ. エムプソン, 岩崎宗治訳, 曖昧の七つの型, 研究社, 1974年 (原書刊1930年)) .

^{注38} ロウは「マニエリスムと近代建築」は初出以来, 悪評を受け続けてたと述べている (Rowe, C. : op. cit., p. 29 (前掲訳書, p. 35)) . 槇文彦によれば, この著作がアメリカ建築界で注目を浴び始めたのは1962年頃であった (槇文彦: モダニズムとの出会い, 建築20世紀PART 1, 新建築社, 1991年, pp. 333-339) .

^{注39} J. パーネット著, 倉田直道訳: 新しい都市デザイン—アメリカにおける実践, 築文社, p. 35, 1985年 (原書刊1982年) . 1963~66年にかけて歴史的環境の保全に関する施策提言が行われ, ニューヨーク市歴史記念物保護法 (1965年) が, 国家歴史保全法 (1966年) が成立した (西村幸夫: 1966年国家歴史保全法および税制上の優遇措置を中心にみた1960年代後半~1980年代前半アメリカの歴史的環境保全制度, 日本建築学会計画系論文報告集, 第452号, 1993年10月, p. 165) .

^{注40} 1962年に世界ではじめて「設計方法に関する会議」が開かれた (J. C. ジョーンズほか著, 池辺陽訳: デザインの手法—人間未来への手がかり, 丸善, 1973年 (原書刊1970年), p. iv) .

^{注41} 内山正雄ほか: 都市緑地の計画と設計, 彰国社, 1987年, p. 195

^{注42} ジョン・ラング著, 高橋彰志・今井ゆかり訳: 建築理論の創造—環境デザインにおける行動科学の役割, 鹿島出版会, 1992年 (1987年原書刊), p. 50

^{注43} Teaching Urban Design, PA., 1960. 12, pp. 128-139

^{注44} Hassid, S. : Architects as Critics, PA, 1962. 11, pp. 146-148 (調査実施1959年)

^{注45} Collins, P. : GENIUS LOCI: The Historic Continuity of Cities, PA., 1963. 7, pp. 100-105. 同号中の特集Apartments in the Context of American Cities, PA., 1963. 7, pp. 107ff. は標題中にcontextの語を含む最初の文献である.

^{注46} Collins, P. : CONCRETE: The vision of a New Architecture. A Study of Auguste Perret and his Precursors, Faber and Faber, 1959

^{注47} この比較例をロウとコッターは, 後に近代主義建築の欠陥を指摘する際に引用した (Rowe, C. and Koetter, F. : Collage City, MIT Press, pp. 68-71, 1978 (渡辺真理訳: コラージュ・シティ, 鹿島出版会, 1992年, pp. 116-19)) .

^{注48} C. アレグザンダー : 形の合成に関するノート, 鹿島出版会, 1978年, p. 13 (原書刊1964年)

^{注49} 章題にも「適合の良さ」「良い適合」がある (C. アレグザンダー: 前掲書, pp. 12, 23) .

^{注50} C. アレグザンダー: 前掲書, p. 86

^{注51} Rowe, C. : Le Corbusier; Utopian Architect, in: Rowe, C. and Caragone, op. cit., pp. 135-142

およびRowe, C. : The Architecture of Utopia, in: Rowe, C., op. cit., pp. 205-223, 1976 (初出1959年) (伊東・松永訳, ユートピアの建築, 前掲書, pp. 255-280)

^{注52} 関雅美: ポバーの科学論と社会論, 勁草書房, 1990年

^{注53} 科学大辞典, 丸善, 1985年

^{注54} 西村幸夫: 前掲論文, pp. 165-176

^{注55} このうち一般公開された作品にThe New City (ハーレム再開発計画. The New City: Architecture and Urban Renewal, The Museum of Modern Art, New York, 1967, pp. 24-29), Buffalo Waterfront (バッファロー・ウォーターフロント計画. Albright-Knox Art Gallery, 1969) がある.

^{注56} Copper, Ⅱ. Ⅱ. : The Figure/Grounds, The Cornell Journal of Architecture No. 2, pp. 42-53, 1983 (執筆1967)

^{注57} ibid., p. 44

^{注58} 有名な「ルビンの壺」の図などがある.

^{注59} Copper, Ⅱ. Ⅱ. : op. cit., p. 43

^{注60} ibid., p. 44

^{注61} これより早く, 日本の芦原義信はほぼ同様の見解を発表している (芦原義信: 外部空間の構成/建築から都市へ, 彰国社, 1962年, pp. 23-24)

^{注62} Caragone, A. : op. cit., p. 349 ; Dennis, M. : Court and Garden: From the French Hotel to the City of Modern Architecture, MIT Press, 1986

^{注63} Schumacher, T. : CONTEXTUALISM. Urban Ideals and Deformation, Casabella, 1971. 5-6, pp. 78-86 (八束はじめ訳, コンテクスチュアリズム—都市の理想形とその変形について, 八束はじめ編, 建築の文脈都市の文脈, 鹿島出版会, 1979年, p. 132-153)

^{注64} Venturi, R. : Complexity and Contradiction in Architecture, The Museum of Modern Art, 1966 (主要部分は1965年に雑誌発表) (R. ヴェンチュリー著, 伊藤公文訳, 建築の多様性と対立性, 鹿島出版会, 1982年)

^{注65} ヴェンチュリーは, T. S. エリオット, K. パーク, C. ブルックス, Ⅱ. エンブソンらの文学批評理論を応用した. (R. ヴェンチュリー, 前掲書, pp. 25-27, 40, 44-49, 52, 88)

^{注66} Venturi, R. : op. cit., pp. 34ff. (伊藤公文訳, 前掲書, pp. 66ff.)

^{注67} ibid., pp. 88ff. (伊藤公文訳, 前掲書, pp. 163ff.)

^{注68} ibid., pp. 41ff. (伊藤公文訳, 前掲書, pp. 79ff.)

^{注69} ibid., pp. 43-44 (伊藤公文訳, 前掲書, p. 85-88)

^{注70} Venturi, R., Brown, D. S. and Izenour, S. : LEARNING FROM LAS VEGAS. The Forgotten Symbolism of Architectural Form, MIT Press, 1978 (初版刊1972年) (石井和紘・伊藤公文訳, ラスベガス, 鹿島出版会, 1978年

^{注71} ibid., pp. 3, 72 (前掲書, pp. 24, 95)

^{注72} ヴェンチュリーらはJenkes, C. and Baird, G. : Meaning in Architecture, George Braziller, 1969を参照した (Venturi, R., et al. : ibid., pp. 131 (前掲書, p. 173)) .

^{注73} 従来, L. マンフォードなど近代主義の批評家から醜悪とみなされてきた (R. ローゼンバウム, レヴィットが建てた家, エスクァイア編集部, エスクァイア アメリカの歴史を変えた50人 [下], 新潮社, 1988年 (原書刊1983年), pp. 42-62) .

^{注74} 同様の立場に立つ研究として, Rapoport, A. : House Form and Culture, Prentice-Hall, 1968 (A. ラポポート著, 山本正三・佐々木史郎・大嶽幸彦訳, 住まいと文化, 大明堂, 1987年), Michelson, Ⅱ. : Most People Don't Want What Architects Want, Transaction 5, 1968, pp. 37-43がある.

^{注75} “symbolism” は「象徴性」と訳される例が多いが, 本稿では文脈に応じて「象徴作用」の訳語も用いた.

^{注76} 伊藤延男・桐敷真次郎訳: 「ベニス憲章」和訳, 月刊文化財, 1995年2月号, pp. 35-37

^{注77} Preservation in context, PA., 1972. 11, pp. 64-69

図版出典

図1 Caragone, A. : THE TEXAS RANGERS. Notes from the Architectural Underground, MIT Press, 1994, Plate 2 Top, p. 349

図2 R. アルンハイム: 美術と視覚—美と創造の心理 (下), 美術出版社, 1964年, p. 295

図3, 図6, 図7, Rowe, C. : The Mathematics of the Ideal Villa and Other Essays, MIT Press, 1976, pp. 172, 183

図4 Venturi, R. and Brown, D. S. : A View from the Campidoglio. Selected Essays 1953-1984, Harper & Row, 1984, p. 13

図5 Collins, P. : CONCRETE. The vision of a New Architecture, Faber and Faber, 1959, Fig. 93A, 93B

図6, 図7 The Cornell Journal of Architecture No. 2, 1983, p. 44, Plates

図8 Dennis, M. : Court and Garden. From the French Hotel to the City of Modern Architecture, MIT Press, 1986, p. 73

図9, 図10 Rowe, C. and Caragone, A. (ed.): , AS I WAS SAYING: Recollections and Miscellaneous Essays, Vol. 3: Urbanistics, MIT Press, 1996, p. 101, 93

図11 Venturi, R. and Scott Brown, D. and Izenour, S. : LEARNING FROM LAS VEGAS, MIT Press, 1972, p. 70

(1997年6月10日原稿受理, 1997年9月19日採用決定)